

## 第16期生 卒業エッセイ

### 気品泉源、智徳模範

第16期生 平間 遥絵

「気品の泉源、智徳の模範...以て全社会の先導者たらんことを欲するものなり」。

小野ゼミの門を叩いてから早くも2年が経ち、卒業まで僅か2ヶ月を残すのみとなった。私は、慶應義塾大学で、何を学んだのか。それは、冒頭の一文に集約されているといっても過言ではないであろう。この卒業エッセイを執筆するにあたり、小野晃典先生や先輩方、そして同期への言葉など、書きたいことは山のようにある。しかしながら、私は、本稿を、いつか本稿を読み返す未来の自分に、冒頭の一文と共に捧げようと思う。

ある日の本ゼミで、先生は徐にチョークを握り、黒板に漢字8字を並べた。「気品泉源、智徳模範」。この意味が分かるゼミ生はいるかと、先生がゼミ生に尋ねたとき、大半のゼミ生は、その文字を見たことも、聞いたことすらなかった。先生は、塾生でありながら、この言葉を知らずして卒業しようとしている私たちに対して、丁寧に、その言葉の意味を教えてくださいました。「社会の先導者たる者、周りの人々の智徳の模範となるよう、しっかり学び、智徳を備えなさい。これが、智徳模範の意味。でも、それだけじゃダメなんだ。智徳を備えるだけではなくて、人と接する上で、気品や人格といった、人間としての品も兼ね備えた人間になりなさい。それが、気品泉源という意味。どんなに頭が良くても、気品が無いとダメなんだよ。慶應義塾を卒業していく者は、こういう人間になって社会を先導していきなさい、という意味なんだ。」先生が説明して下さったとおり、本稿における冒頭の一文は、慶應義塾の教育理念を最も簡明に言い表した一文であり、慶應義塾の真の目的と呼ばれているそうだ。私は、その時先生が放った一言一言が、今でも心に突き刺さっている。それは、その言葉が持つ意味の深さや、慶應義塾の理念に感銘を受けたわけでは決していない。その言葉の意味を教えてくださいましたのが、私にその言葉通りの教育をして下さった、私の恩師であったからである。



関東マーケティング大会で審査結果を待つ様子  
(著者は中央)

思い返すと、私は小野ゼミに入会するまで、この言葉のような人間とは程遠い日々を過ごしていた。恥ずかしながら、学校には殆ど行かず、試験前には、試験範囲を教えてくださいと連絡して回る、何とも情けない学生であった。そのような、人間として気品も智徳も皆無であった私を、小野先生や先輩方は、小野

ゼミ第16期生として温かく迎え入れてくださった。「こんな私をゼミに入れてくれたのだから、小野ゼミで一生懸命頑張ろう。」当時の私は、一念発起し、そう強く心に誓って小野ゼミの門を叩いた。しかしながら、物事はそううまくはいかなかった。まず、大学生活において初めて取り組む、レポートという壁にぶつかった。1000ページを超える本の要約と考察が、毎週の課題として課されるわけだが、怠惰な性格が抜



関東マーケティング大会で受賞を喜ぶ論文チームの同期と、  
応援に駆けつけてくださった第15期ゼミ長  
(著者は左端)

け切っていなかった私は、提出日前日に徹夜をしてレポートを終わらせ、次の日のサブゼミでは眠気のあまり、いつも抜け殻のようになっていた。更に、ディベート大会、KUBIC、ケースメソッド、そして論文執筆など、タスクが積みかけるように私の前に現れ、悠々とやり抜く同期の傍ら、小野ゼミで頑張り続けることに自信を無くしてしまったことが何度もあった。それでも、私が小野ゼミで頑張り続けることができたのは、私の不甲斐なさも全て受け入れ、サポートしてくれる同期、先輩方、大学院生さん方、そして先生が、いつも傍にいてくださったからである。

その結果、ディベートでは、無事、連勝記

録を守ることができた上に、関東マーケティング大会では、論文賞とプレゼン賞を受賞することができた。一生懸命に前だけを見て突き進み、仲間と喜びを手にしたこれらの経験は、私にとって青春そのものである。

このように、大学生として底辺のような日々を過ごしていた私が、これ程までに何かに熱中し、時には仲間と涙を流しながら喧嘩をし、それでも最後には、どことなく達成感や充実感に溢れるような、素晴らしい経験をすることができたのは、紛れもなく小野ゼミのお陰である。私は小野ゼミで、数えきれない程のたくさんのお話を学んだ。それは、締め切りに必ず間に合わせることや、仲間迷惑をかけたなら誠心誠意謝ること、書類のミスは許さないことなど、人間として基本的なことから、何事にも一生懸命に取り組めば、その経験が自分にとって学びとなり、知識となり、財産となることや、周りの仲間を大切にせずして、大きな達成は得られないことなど、これからの人生で大切にすべきことまでさまざまである。

しかしながら、これだけ多くのことを学ばせて頂きながら、まだまだ私は、気品の泉源からも、智徳の模範からも、程遠いように思う。だからこそ、これから卒業後、社会へ羽ばたいていく未来の自分には、本稿における冒頭の一文を、常に自分に問いかけてみてほしい。慶應義塾、そして何より、小野ゼミのOGとして、自分は恥ずかしくないであろうか、常に立ち止まって考えながら、前へ進んで行ってほしい。何事にも一生懸命に取り組む、好奇心をもち学ぶ姿勢を忘れず、そして、周りの人々に対する感謝を、常に忘れない人間になってほしい。だってそれこそ、私が小野ゼミで学んだ全てなのだから。そして、慶應義塾の卒業生として誇らしい人間になることこそ、私が去る学び舎への、小さな恩返しだと思うからだ。